

Title	木の枝と再生
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 2 p.83-p.89
Issue Date	1990-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79480
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

木の枝と再生

井本 英一

人間が樹木、ことに枝から生まれたという伝承は多くの民族の間に見られる。「生まれ出る所は死にゆく所である」という論理からすれば、樹木は人間が死後に帰る所であった。樹幹をタテに割り、一方を丸木舟状にくり抜き、もう一方を蓋にした原始的な棺に死体を納めた時代があったと推測することができる。多くの民族が、棺のことを「舟」と呼んでおり、古代エジプト人のように、実際、死後はナイル川を渡って西岸のあの世に行く例もある。木や木の枝は、死者の再生には欠かせないものであった。いっぽう、再生の意識は薄れ、誕生という観念が前面に出てきた。

朝鮮の新羅の脱解王時代のことであるが、月城の西にある始林で大きな光がさしたので、大臣の瓠公が行って見ると、黄金の櫃が木の枝に掛かっている、そこから光がさしていた。王が櫃を開けて見ると、一人の男の子がいた。名を閼智（子供あつちの意）と付けた。金の櫃から出たので姓を金氏とした（『三国史記』新羅本記第一、脱解王九年三月と『三国遺事』記異第一、金閼智 脱解王代）。始原の林である始林で、鶏の鳴く声が生きて金色の櫃が紫色の雲に乗って降りてくる。始林はこれ以後鶏林と改称され国号となった（新羅というのはずっと後になってからである）。この伝承の中に、さまざまな象徴が用いられているのを見ることができる。その中で、ここで問題にするのは、木の枝から子供が生まれる点である。朝鮮には似たような伝承がほかにもある。駕洛国の起源について次のように伝えられている。三月の禊浴の日、亀旨峰に、みなを呼ぶ怪しげな声がした。九人の長（九千）らが「自分たちがここにいます」というと、「汝らは峰の頂上の土を掘り、それを撮とって次のように歌え。『亀よ亀よ、首を出せ。もし出さなければ焼いて食べよう』。このように歌って舞えば大王を迎えて歓喜勇躍できる」とあった。九人の長が舞っていると、天から紫色の縄が降りてきて地面についたが、その先に赤いふくさに包まれた金色の合子がついていた。中に黄金の卵が六個入っていた。この六個の卵から六人の男の子が生まれた（『三国遺事』記異第二、駕洛国記）。ここでは、九千らが手に土をとって舞ったとあるから、採り物には土もあったと考えられる。その土も、ただの土ではなく、聖峰の頂上の土であった。聖峰の頂上には神が降臨するが、頂上は枝や檜の先と同じものと見られるので、その土は採り物とされたのであろう。わが国の九種の採り物の中にはないが、土をとって舞うのは古い伝統ののちのちのものと思われる。その土をとって舞っていると紫色の縄が天から降りてきたのである。これが神子誕生の伝説であった。

四月八日の仏誕日にもこのような伝統が見られる。仏伝によれば、釈尊の母、摩耶夫人は釈尊

を生むとき、藍毘尼園の無憂樹の枝につかまって分娩したという。美術では左手を枝あるいは幹にからませ、右手を上げる形をとったものがある。これは、分娩できばるときの支えと考えないで、枝から聖なる子供が生まれる表象と考えた方がよい。いわゆる樹下美人像の中にはこの形式のものがあ、古代インドのパールフトやサーンチーの仏塔の玉垣に見られる石像の裸女像などがこれである。樹木と組み合わされた女性は、とうぜんのことながら、豊稔のシンボルとされる。女性は樹木の枝を通じてあらゆるものを生み出すということをいおうとしているのである。

このような背景をもつ四月八日の行事について、朝鮮の洪錫謨『東国歳時記』（姜在彦訳『朝鮮歳時記』平凡社、昭和46年所収）には次のようにいっている。四月八日は、燃燈の行事を行なうので、燈夕という。民間では数日前から燈竿をたて、その竿先に雉の尾羽根を飾り、色帛でつくった旗をたてる。貧しい家では燈竿の先に老松の枝を結びつける（87頁）。ここでいう、貧しい家の風習に、かえって古い形式が見られるようである。燈そのものも誕生と関係があるが、枝こそもっとも根源的なものであった。羽根や旗も採り物の異形の一つと考えられる。この日の行事に水缶戯というのがある。これは、盆水にひさごを浮かばせ、箒の柄で叩いて単調な音を出す遊びである（93頁）。ひさごと箒は、採り物の一種である。これらの採り物を使って、母胎に見立てたひさごを採り物である箒の柄で叩いて音を出して釈尊の誕生を寿いだのであろう。

中山太郎『日本民俗学辞典』（名著普及会、昭和55年＝昭和16年）の「アンザンノマジナヒ」の項の「子安木」に、『筑前旧志略』巻下を引いている。筑前糟屋郡宇美村の宇瀬八幡宮。応神天皇がこの地で降誕したので、この村はその名を負う。この社のそばに槐の木があるが、神木と崇めている。神功皇后がお産したとき、この槐の枝に取りすがって安産したからである。今もこの木を子安と称し、安産のお守りとする。このことは『愚管抄』巻三にも見える（98頁）。えんじゅ（槐）は本来、中国原産の樹木であるが、中国でも霊木視されていたことがうかがえる。中国でも出産のさいに槐の枝が用いられる。永尾龍造『支那の民俗』によると、生まれてから三日目に、洗三すなわち初湯の儀式が行なわれる。木桶を用いるときは、桶は赤い色に塗ってあり、手拭も赤色のものを喜ぶという（44頁）。初湯はふつうの湯ではなく、桑と槐の木の小枝を煮た湯を使う家もある。また艾と槐の枝を煮た湯を使う場合もある。北京ではこの湯を使うと無病息災に育つといわれている。桑の木をめでたがるのは、昔、日の出る所に扶桑という神木があったという伝説に由来している（44－5頁）。これらの枝について、中国人はいろいろな解釈を加えているが、枝が出産や誕生と深い関係をもっていることも付け加える必要がある。赤い桶を使ったり、赤い手拭を使うとあるが、この赤も、境界に表われる赤に他ならない。なぜ二種類の樹枝を用いるのかとなると、さまざまな解釈が可能であろうが、安産できる護符として用いると考えるのが無難であろう。朝鮮のパンソリに歌われる佳人春香の名の由来は、退妓であるその母が、初めて春香を妊ったとき、夢に一人の仙女が両の手に桃の花と李の花のついた枝をもって空から降りてきて、桃の花をさし出し、この桃の花を育て上げ、李の花に接ぎ木すれば老い先は恵まれるだろう、といったのを聞いて夢よりさめ、娘を生み落としたが、桃の花は春の香であるので春

香と名づけたという（「春香歌」申在孝『パンソリ』姜漢永・田中明訳注、平凡社、1982年所収）。ここでは、春香は枝から直接生まれたのではないが、桃の枝を介して生まれており、李の枝とも深いつながりをもっている。本来は二元論的な陰と陽を象徴する枝であったのだが、二種類の木の枝になり、もとの意味は忘れられたのであろう。

桑の枝が神聖視されたが、山桑である柘の枝も神聖視され、この柘枝から生れた女性の伝説が古代にはあった。吉野には川を流れてきた柘の枝から化生した仙女を、梁を打たないで、取らずにいられようか、という意味の歌や、吉野の仙である味稲が、柘枝仙媛に与えた歌などが『万葉集』に収録されている（385—387）。吉野川の柘枝伝説は『続日本後紀』や『懷風藻』にも見られ、水野祐『羽衣伝説の探求』（産報、昭和52年）では、羽衣天女と関連づけて論じられている（62—83頁）。柘枝は古くは山人の採り物であったと考えられる。この枝に、山姫が降臨する時代があったのである。中国でも柘枝が採り物とされた。柘枝は北魏の拓拔氏と関連づけられるが、これらは漢字構成上の偶然の一致であろう。つまり、拓を易えて柘となし、抜を易えて枝となすというのである。昔、歌と舞とがうまく合わなかったが、唐人が柘枝詞を作ってから舞う者の採るものと、歌う者の言葉とが相応じようになり、戯劇のはじめとなった、と諸橋轍次『大漢和辞典』巻六の「柘枝舞」の項に『瑣碎録』を引用していつている。これを見ると、中国でも山桑の枝である柘枝を手にして舞った時代があったことが分かったと同時に、この歌と舞が、日本と同じように劇のいとぐちになったことが分かる。『万葉集』など、日本の伝承では、柘枝は丹塗矢と同じように、化して女性となる。朝鮮の春香の場合を見ても、枝が成女ではなく、赤ん坊を生む。この点、日本の伝承は特異であるといえる。

世界の猟師や漁師の間に広く信じられる信仰の一つに、自分たちがとった動物、鳥、魚の種が絶えてなくならないために、それらの生き物が死後に再生したり、生き残りの種が死んだ仲間を補うために子を生むという信仰がある。当然、そこには呪術が介在する。『定本 柳田国男集』第十巻所収の「先祖の話」によると、秋田のマタギは熊を取って山中で解体する際に、剥いだ皮を熊に逆さに被らせ、榊の枝を手にもって唱えごとをする。熊を浮かべるためだとも、また、とむらいだともいつている（81頁）。狩猟では獲物の皮を剥いで必要なものだけを運搬し、内臓の一部を神に捧げるのが、狩猟行程が長く、十分な運搬手段をもたない原始的な狩人の行動である。この場合、殺した生き物の骨は丁寧に取り扱い、その骨から再び同じ動物が再生、あるいは新生するように願うのである。秋田のマタギが、死んだ熊にその毛皮を逆さに被らせるとあるが、これは死を象徴する行為である。このような熊に向かって榊を手にして唱えごとをするのは、死せる熊を再生させるための枝と考えられよう。しかし、その際榊の枝を用いるのは、必ずしもそれが死の穢れにだけ関係していないということを示唆している。

枝の先に神が降臨するのが、採り物の原義であった。このような伝承が、共同幻想として、説話として伝えられた。N. ネフスキーが記録して残しているところによると（岡正雄編『月と不死』平凡社、昭和46年）、宮古島の根間の旧家に美人が生まれたが、長じて妻子ある者とねんご

ろになったので、父親は怒って息子に殺すようにいづける。息子は墓地まで妹を連れていったが、殺すことができず、家に連れ帰してかくしておいた。娘は七日七夜の間、神に祈りをささげていたが、八日目に庭に出ると姿が見えなくなった。数日後、庭の福木の梢に妹が現れ、私はもう神になっている、といって見えなくなった（32-33頁）。おしらさまの話とやや似たところのあるこの話は、神が木の枝に降りてくる点で共通している。一方は桑の木で古来の聖木である。他方は福木で地方色がある。神は木の枝の上に降りてくるのであるが、木の枝から生まれるとも考えられるのである。

東南アジアの自然民族の間では、出産と樹木との関係を具体的に示す例が見られる。かつては、今よりはもっと広い地域に分布していたと考えられる、インドシナの山岳民族であるピー・トング・ルアング族の女性がお産をしたあとの後産は、葉でくるまれて、木の上に吊りさげるのではなく、木の上に置いておく。後産が動物に食べられることを悪い予兆とすることも知られていないのに、なぜこのように後産を始末するのか、その理由は分からないという（ベルナツィーク著・大林太良訳『黄色い葉の精霊』平凡社、1968年 298頁）。人間の子供は、実際は母の胎内から生まれるが、後産を木の上に置くのは、人間が木から生まれるという観念が残っているからにほかならない。日本で後産を始末する場所は、便所のそばの土中、村境、あるいは、かつての京都の吉田山山頂のような場所である。これらの場所は、いずれも境界と見なされる場所である。ピー・トング・ルアング族が、後産を木の上に置くというのは、後産を境界にもどすことを意味していて、種が絶滅しないための呪術でもある。木が人間のいわば母胎であるという観念はこの地方の民族に広く見られる。マレー半島の付け根の部分であるメルグイとタイ国南部に住むモーケン族の民話に、次のように言われている。昔、一人の孤児が住んでいたが、隣人の棄てる屑物で生きていた。しかし、隣人から追い出されて密林の中に入ってゆき、木の葉で裸体を覆った。彼は木の下に横になり眠りこんだ。夢の中で、バンヤンの木を切り倒して梢の側から木に向かって歩いていった。そこに、二束の稲、二個の卵、二本のナイフ、二人の子供を見出した。そのあとで、バンヤンの木を焼き、その灰の中に稲を植えた。それ以来彼は食物に事欠くことは決してなかった（前掲書、58-9頁）。モーケン族の考えでは、木の中にこのようなものがある。枝の方から幹に向かって歩くとこれらが生まれたという。つまり、子供や卵のほか、稲やナイフが生まれている。稲やナイフは、日本風にいえば、採り物に相当するもので、子供や卵は採り物から生まれ出るものである。これら二種類のものが自然民族の間では、一つの木の中にあることは興味深い。ベトナムの民話によると、ある罪を犯し、神に罰せられて亀の姿に変えられた男の顔に、この亀と結婚した末娘が、枝と葉っぱを置いてやると、もとの若者に戻り、二人は幸せに暮らした（畠田健次「ベトナムの少数民族タイ族の民間伝承文学」『世界口承文芸研究』大阪外国語大学口承文芸研究会、第三号、1982年所収）。ここでは、死者の再生でもなく、枝からの新生でもなく、枝と葉を介して亀がもとの人間に変身する。

インドの例は、摩耶夫人に見たところであるが、木村重信『ヴィーナス以前』（中央公論社、

昭和57年)によると、地母神と樹木との結合はすでにインダス文明に現れている。ハラッパーとモヘンジョ・ダロでは、神聖なイチジクの木の下に立つ裸のヤクシーの女神が表現された。この図像は全オリエントに共通するイメージであるが、時おり裸体の女神がイチジクの枝の間から現れることがある。また、フレーザーも詳しく書いているが、インドでは、シヴァ神とパールヴァティー女神の彩色をほどこした小さな土偶の祭りであるラリー祭が行なわれる。この二つの神像は、草と花の山に立てた枝の上に置かれることによって、植物の精霊となり、このような植物神が、植物と人像によって二重に表わされる(139-40頁)。角田直美・麻井玖美『インド紀行』(保育社、昭和55年)によると、インドのカルカッタにあるヒンズー教のカリガート寺院の主神はカーリー神であるが、ここには「子授けの木」がある。この木の枝から枝にかけて花飾りが連なり、根元にはお供えが積まれているが、全部朱色の粉がふりかけてあるのでまっ赤だ。枝にはガンジス川から拾ってきた小石がいくつもくくりつけてある。子供が生まれると、六か月になったとき、お礼詣りに来ることになっているという(104頁)。インドにおけるこれら二つの行事は、片方は土偶を用い、片方は小石を用いるが、花飾りをしたりする点でももとは同じものであったと考えられる。根元の供物に赤い粉をまいてまっ赤にするとあるが、境界の赤の表象である。各人がガンジス川から拾ってくる礫が一つであるのか二つであるのかは不明であるが、どちらでも説明は可能である。一つの場合、それは枝から生まれ出る子供を表わすのである。二つの場合は、男女二神の土偶と同じように、男女の原理を表わし、生殖の原点となる。枝に花を掛ける風習に関しては、朝鮮の例をあげると、上元の日、山間地方では、枝の多い木を牛小屋の裏側に建て、五穀の穂や綿花を掛けておく。子供たちが早朝に起きて、木の周囲をまわりながら歌をうたい、豊年を祝して日の出に及ぶ(『東国歳時記』)。ここでは子安の木としてではなく、豊饒の木として、その枝に(まだ初春で花が少ないので)綿花を掛ける。牛小屋の裏に木を建てるとあるが、これは家畜の増殖を祈願しての行為で、ひいては人間にもおよぶものである。枝に土偶や礫を結びつける風習は、その枝から子供を生み出す呪術であることは上に見たとおりであるが、ヘロドトス『歴史』(松平千秋訳、筑摩書房、昭和42年)7・26にあるマルシュアスの革袋は、これと関連すると思われる。ヘロドトスによると、小アジアのブリュギアにケライナイの町がある。この町からマイアンドロス川とカタラクテス川が水源を発しているが、この町にマルシュアスの革袋が吊してあるという。クセノポン『アナバシス』(松平千秋訳、筑摩書房、1985年)1・2・8によると、カタラクテス川はマルシュアス川と呼ばれるが、その理由が、神と技能を競おうとしたマルシュアスがアポロンに敗れ、生皮を剥がれたが、その皮が川の水源が発している洞窟に吊してあったからだという(9頁)。マルシュアスの革袋は吊してあるというが、柱あるいは枝に吊すことになるが、枝に吊してあったと考えられる。いけにえとして木の枝に絞首するやり方の異形と考えられるが、それが発展しての容れものとなった。

この革袋は母胎と見なされ、そこからものが誕生するとされたのであろう。クセノポンの記録では、水源の洞窟の中に吊してあったというから、きわめて始原性のつよいものとされたことは

確実である。

現在でも、イランのゾロアスター教徒にとっては、常緑樹の枝は生命の誕生と深い関係をもっている。M. ボイス『イランにおけるゾロアスター教の保塁』（オックスフォード、1977年）が、イランのヤズドに残存しているゾロアスター教徒について記録しているところによると、新年には友人、親戚、知人が家々を訪ね、新年の挨拶と象徴的な贈り物——杉や松の枝や地下室に保存しておいたザクロ——の交換をする（170頁）。枝の交換は、沖縄人が枝を手にもって英人を迎え、英人も同じように枝を相手に与えることによって初対面の挨拶をしたのを思い出させる。枝の交換が、とくに新年に行なわれるのは、枝のもつ生産性と関係がある。また、ゾロアスター教徒は新年に結婚式を行なうことが多いが（古代イランのゾロアスター教の王朝の即位式は新年に行なわれた）、両家の父親は、テンニンカと杉の枝を置いた盆の上で握手をする（173頁）。枝の上で契約をするのが、あるものの産出を期待する行為と見られる。アケメネス朝時代の王は、パレスマンという採り物を手にして儀式に臨んだが、王の新年の即位式においても、とうぜんのことながら採り物を手にした。枝からは王権・魂のようなものが生まれ出るとされたのであろう。あるいは、この採り物で臣下の肩に触れるときは、王の恩寵を伝達すると考えられたであろう。

ギリシア神話では、幼童神アドニス^{アドニス}は木から生まれるとされた。オウィディウス『転身物語』（田中秀央・前田敬作訳、人文書院、昭和41年）10・503以下によると、アドニスは木の中で成長してゆき、自分の宿っている腹をやぶって出ていく口をさがしていた。お産の女神のルキナは苦しんでいる木に近づき、その枝に手を触れ、産婦の苦しみをのぞいてやる呪文を唱えた。すると、たちまち木が裂けて、その裂け目から生きた赤ん坊が、いさましい産声を上げてとび出した（364—5頁）。幼童神アドニスのマケドニア版はディオニュソスであるが、この神も木の幹あるいは低木の茂みから生まれ出るとされた。そこで、ギリシアでは、ディオニュソスに付けられる形容辞は、「木の」とか「木の中の」であった。このような幼童神は、生まれては、若いうちに非業の死を遂げるとされ、穀霊として穀物や穂や茎に宿るとされた。このような穀霊の場合には、神として茎や穂から生まれ出ることではなく、秋に刈られて殺されるまで茎の中にいるのを常とした。アドニスのエジプトの同類であるオシリスの場合は八つ裂きにされた肉体を入れた袋が木に掛けられるか、木の中に封じ込められた。かくてオシリスは幼童神ホルスとして生まれ出るのであった。このような伝承を見ると、枝から生まれる前に、それぞれ、何らかの死の状態を経ていることが分かる。アドニス神話は、その淵源は遠くシュメール・アッカド時代の「イナンナ（イシュタル）女神の冥界下り」にまで遡るのであるが、アポロドロスの『ビブリオテカ』が伝える神話は、そのギリシア版といえそうである。アプロディテは可愛らしいアドニスを箱の中に入れて冥界の女王であるペルセポネにあずける。ペルセポネは箱を開けて、アドニスの美しさに魅せられ、アプロディテに返すのを拒む。アプロディテは地下界にアドニスを取りにゆく。結局、ゼウスの審判によって、アドニスは一年の何か月かを地上で過ごし、残りを地下で過ごすことになる。しかし、この若者は狩猟のさいちゅう、猪に殺されてしまう（3・14）。ところで、興

味があるのは、この場面を描いた壺絵その他の美術では、ペルセポネは片手に枝をもち、片手を箱に向けている点である。今までも、手形と枝が再生儀礼に現れるのを見てきた。ペルセポネは、このような象徴と共に、年ごとに死と再生を繰り返したのであった。

（1990. 1. 8 受理）